

技術者と技術者コミュニティ

大橋 秀雄 / HIDEO OHASHI
(工学院大学理事長)

同志小野田武会員の訃報に接し、深い悲しみと衝撃に沈んでいます。氏の絶筆となった先号のフォーラム記事は「大橋先生、バトンタッチ致します！」で終わっています。私は遺命に従って第二走者を務め、氏が蒔いた議論を燃えあがらせることに専念します。

岡目八目とはよく言ったもので、他人の領域の方が客観的・冷静に判断できます。そこで我々が属する工学界でなく、お医者さんたちが属する医学界を例にとって考えてみましょう。

* * * * *

我々が医学教育に期待することは、医学者を育てることではなく、我々の健康を守り、人生の最後を見とどける信頼できる医者を育てることです。医者には最新の医学知識に基づく医療を期待しますが、知識だけで医療は完結しません。医者は自らの経験と判断で知識を繋ぎ合わせ、目の前の患者に最適な治療手順をデザインします。たとえ治療方法が知られていない難病であっても、延命に全力を尽くします。医療は依然として科学ではなく、医者 of 全能力を結集する芸術です。

医学界では、永らく Medicine を医学と訳し、それがあたかも学問であるかの幻想を抱かせてきました。Medicine は医学でなく医療行為すなわち医業を指し、Medical Doctor, MD は医学者でなく医者であります。

医療の前線に立つ医者が、目の前の患者を救うために知識の限界におち当たり、ときに自ら新しい知識と治療法を求めて研究者となるのは自

然なことです。医者としての基盤に立った研究者、これを医学者と呼びましょう。医学者は、生命科学という科学の一ジャンルを担う科学者そのものであり、その意味では理学部や農学部出身の生命科学者と同じ土俵で競い合います。しかし医学者は、より医療の現場に密着しているため、未踏のテーマに取り組んで大きな発見に遭遇する可能性が、他の生命科学者より明らかに高まっています。生命科学に関わるノーベル賞の多くが医者に与えられているのは、これを実証しています。しかし、医学者とくに大学教授の口から、ときに「町医者が」という見下した表現が飛び出します。研究の成果を医療の現場で活用するのは誰でしょうか？役割の違いと上下関係を混同してしまったのでしょうか。

* * * * *

人工物に囲まれた現代社会にあって、日常生活における我々の生命は、人工物の信頼性と安全性に懸かっています。人間の健康を守る役割が医者に託されているのと同様に、社会インフラから食品・薬品に至る人工物の健康を守る役割は技術者に託されています。では、社会が技術や技術者に期待するものは何でしょうか？

上記の医学と医者に関わる記述の中で、医学を工学に、医者を技術者に、医学者を工学者に、医療・医業を技術業 (Engineering) に、そして Medicine を Engineering に置き換えてください。そこに、社会が我々に期待することがすべて現れています。

1億2千7百万人の健康を、26万人の医師と9

万人の歯科医師を中心とした膨大な医療従事者が守っています。それに比べると、人工物の健康を守る260万人の技術者は、所属企業の一員であるという意識のみが先行して、共通の使命意識で結ばれることが欠落していました。ギリシャ時代から尊敬されるプロとしての地位を確立してきた医師と比べて、200年の歴史しかもたない技術者の社会的認知はあま

りにも希薄です。

若者の科学技術離れを嘆いてみても潮流は変わりません。技術者の集団としての存在と役割を、社会に認知させることがすべての出発点となります。そのためには、技術者が共通の使命意識で結ばれて、一つのプロ集団として、技術者コミュニティとして結集することが先ず必要となります。